

『吾輩は猫である』活眼

Junko Higasa 2015.10.24

第二章は旅順陥落の正月。赤と深緑の中に「吾輩」が描かれた年始状から始まる。苦沙弥はそのキリスト教カラーには感服したが、中に描かれたものの形状が判らない。そして訪ねてきた寒月と共に、戦勝に浮かれた世の中へ出て正宗の杯を傾ける。吾輩は「食えるうちに、何でも食って置こう」と未知なる餅に食らいついて失敗し、三毛子という旧幕体制に癒しを求めに行く。

吾輩が家に帰ると、越智東風が、迷亭に一杯喰わされた話をしている。それによると迷亭が「トチメンボー」という存在しない料理を注文し、西洋に通じないボーイも越智も、その実在を信じてしまう。

そのうち寒月と迷亭のテレパシー話が始まり、感応体験のない苦沙弥も、無理に話を合わせてしまう。そのように日常の談話にさえ人間の競争意識は出る。

吾輩は思う。要するに誰も西洋の文化を知らずに、西洋通になろうとしている。万物を己の方に引く巨人引力で「向上」といって空ばかり見上げ、戦死した若者を顧みず、猫の色・形の違い（国民の特質の違い）に気付かず、ローマ人の胃袋を真似ようとする。日本人は、いずれ胃病を起こすかもしれない。

誰のためにでも死にたくない吾輩は、国のために鼠を取った(ロシア兵を倒した)ことはないが、手柄を立てた軍人同様、活字媒体で多少有名になったのはありがたい。人間にこの発言の価値を知らしめたい。